

白石市文化財調査報告書第23集

# 谷津川・江ノ下遺跡調査報告書

昭和 56 年 3 月

白石市教育委員会

# **谷津川・江ノ下遺跡調査報告書**

## 序

東北地方の夜明けともいいくべき、東北新幹線の開業を控えて、当地方の古代史の解明もまた急ピッチで行われようとしている中で、白石市に關わる谷津川・江ノ下遺跡が、新白石駅（仮称）前区画整備事業地内に存するため、宮城県教育庁文化財保護課の御指導を受けて、国庫補助事業として発掘調査が実施されました。両遺跡とも、昭和47年2月、昭和49年5月にそれぞれ宮城県教育委員会の手により、一部調査が行われており、中世の火葬施設の確認、弥生土器、中世陶器等が確認され、更に炭化米、トチ等草木種子が出土しております。

今回の調査は、宮城県教育庁文化財保護課の適切な御指導のもと、当市文化財保護委員長中橋彰吾氏をはじめ、関係各位の御協力により、短期間の調査ではありましたが、一応の成果を見ることができました。即ち当白石地方斎が川、谷津川流域とともに、弥生時代から平安時代までの遺物確認の結果、同時代の人々の生活の様相を解明する手がかりが得られ、今後の調査研究を進める足がかりを得た訳でもあります。今回ここに調査報告書を発刊するに当り、関係各位に心から感謝を捧げ、ごあいさつといたします。

昭和56年3月

白石市教育委員会教育長 鈴木五朔

## 目 次

序 文	白石市教育委員会教育長 鈴木五朗
例 言	
調査要項	
I. 調査に至る経過	1
II. 遺跡の位置と周辺の環境	2
III. 調査の方法と概要	4
IV. 発見遺構と出土遺物	6
1. 谷津川遺跡	6
(1) 基本層序	6
(2) 発見遺構	6
(3) 出土遺物	6
(4) 考 察	10
2. 江ノ下遺跡	11
(1) 基本層序	11
(2) 発見遺構	11
(3) 出土遺物	13
(4) 考 察	13
V. ま と め	14

## 例 言

1. 本書は昭和55年度に国庫補助を得て、遺構確認調査を実施した、白石市大鷹沢三沢字室場ほか所在、谷津川遺跡と白石市大鷹沢三沢字江ノ下所在、江ノ下遺跡の発掘調査概報である。
2. 調査および本書刊行は、国・県からの補助金を得て総額200万円の内、2分の1は国庫補助、4分の1ずつを宮城県補助および白石市が負担して白石市教育委員会が実施した。
3. 本調査にあたり、宮城県教育庁文化財保護課職員および白石市文化財保護委員長中橋彰吾氏のご指導を賜わり記して謝意を表する。
4. 地形図は白石市作成の2万5千分の1の地形図を使用した。
5. 本書において、出土遺物の実測は菊地逸夫が行い、執筆・編集は白石市教育委員会主事清野俊太朗と白石市総務課主事遠藤智が分担して行った。
6. なお、本図版中、弥生土器の拓影図は、掲載されたもののかなに若干の体部破片が出土しているが、ここでは器形のわかるもののみ、とりあげた。

## 調査要項

遺跡名：谷津川遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：02133）	遺跡名：江ノ下遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：02134）
所在地：白石市大鷹沢三沢字室場・字川崎	所在地：白石市大鷹沢三沢字江ノ下
調査対象面積：約10,000m <sup>2</sup> （発掘面積999m <sup>2</sup> ）	調査対象面積：約3,000m <sup>2</sup> （発掘面積342m <sup>2</sup> ）
調査期間：昭和55年7月14日～9月26日	調査期間：昭和55年11月20日～11月29日
調査主体者：白石市教育委員会	調査主体者：谷津川遺跡と同じ
調査担当者：白石市教育委員会	調査担当者：谷津川遺跡と同じ
調査指導：宮城県教育文化財保護課	調査指導：谷津川遺跡と同じ
：白石市文化財保護委員会	調査補助員：谷津川遺跡と同じ
委員長 中橋彰吾	調査協力者：谷津川遺跡と同じ
調査員：白石市教育委員会	
社会教育課主事 清野俊太朗	
調査補助員：福島大学 菊地逸夫	
調査協力者：白石市総務課主事 遠藤智	
：白石市都市計画課	

## I. 調査に至る経過

谷津川遺跡は、白石盆地のほぼ中央を北流する斎が川に南東丘陵に源を発する谷津川が合流する地点に位置する。

江ノ下遺跡は、谷津川遺跡の南東約100mに位置する。遺跡の存在が知られるようになったのは、昭和11年から同23年まで行われた斎が川改修工事の際に、流域や河川敷から多量の遺物が発見されてからである。その後、昭和46年10月、日本国有鉄道から東北新幹線の予定路線が発表され、谷津川遺跡については、昭和47年2月28日から同3月3日の期間に予備調査が、また、昭和49年5月29日から6月18日まで宮城県教育委員会の手により調査が行われた。

発見遺構は、中世の火葬施設としての焼土遺構1基。出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、中世陶器等である。

江ノ下遺跡については、約10年前に谷津川の河床から土師器（环、椀）の完形品、須恵器大甕の破片、灰釉陶器等のほか、炭化米、トチ、ドングリ、エノキ、エゴ、その他の草木種子等の植物遺存体が出土している。

近年、白石市では将来の東北新幹線開通に向けて、新白石駅（仮称）前の区画整備事業に着手した。

白石市教育委員会では、区画整備内に遺跡が存在することから、市長部局と種々協議を重ねた結果、宮城県教育庁文化財保護課の指導を受けて、国庫補助事業として遺跡の範囲および遺構の確認調査を実施することになった。



第1図 谷津川遺跡(A)・江ノ下遺跡(B)位置図

## II. 遺跡の位置と周辺の環境

谷津川遺跡は、東北本線白石駅の南東約1.2kmの白石市大鷹沢三沢字室場及び字川崎に所在している。江ノ下遺跡は、谷津川遺跡の南東約100mの地点、大鷹沢三沢字江ノ下に所在している。

谷津川・江ノ下遺跡が位置している白石盆地は、東は阿武隈山地、西は奥羽山脈から派生する山地との間に位置する小盆地で、南北約6.5km、東西約2.5km程の範囲にわたる。盆地の東南部には白石川の支流のひとつである斎が川が、盆地の南端部の山地中に源を発し、北流しながら周囲に沖積低地を発達させ、両岸には自然堤防を形成している。

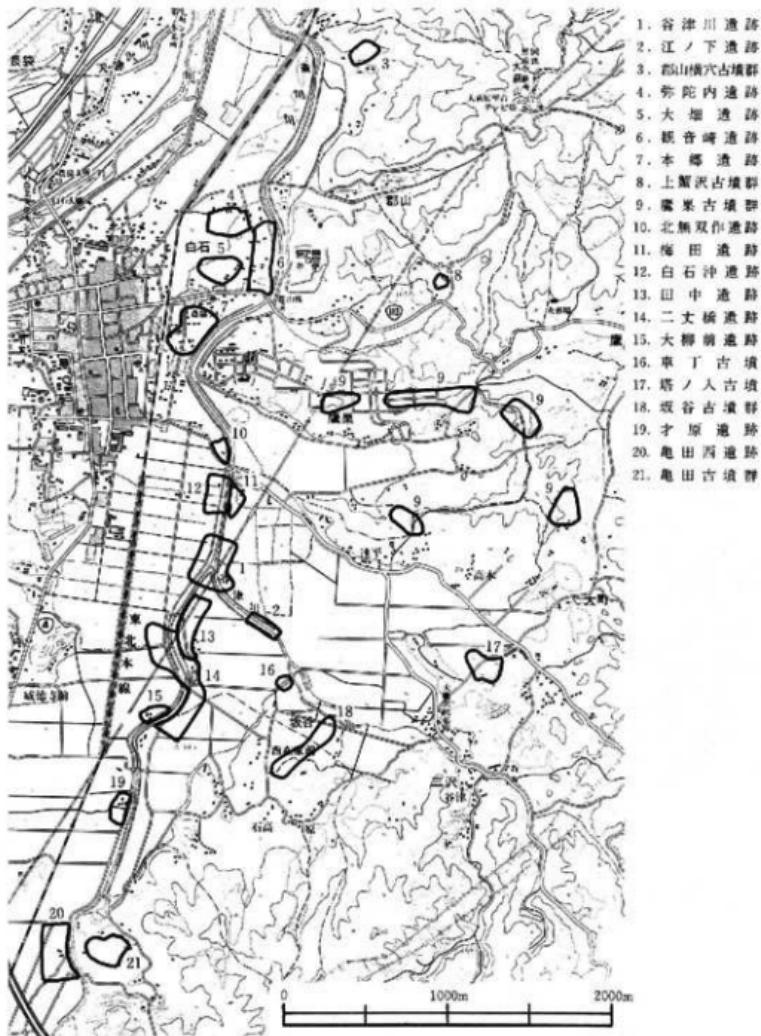
谷津川遺跡は、谷津川が斎が川に合流する自然堤防上の両岸に立地しており、標高約45mの微高地にある。斎が川との比高差は約2m、周囲の水田面との比高差は約0.5mである。

江ノ下遺跡は、谷津川の河川敷及び周辺の自然堤防上に立地している。標高約47mの微高地にあり、谷津川との比高差は約4mである。

谷津川・江ノ下遺跡が立地している斎が川流域には数多くの遺跡が存在している。縄文時代の遺跡は極めて少なく、弥生時代に入って大柳前遺跡、谷津川遺跡、大畠遺跡からは弥生土器が、田中遺跡、梅田遺跡、弥陀内遺跡からは石包丁が出土しており、この流域で稻作農耕が開始されたと考えられる。

古墳時代には、流域沿いに龜出西遺跡、田中遺跡、北無双作遺跡、観音崎遺跡などが知られる。また古状丘陵上には鷹巣古墳群や亀田古墳群があり、縁辺部の低丘陵上に上蟹沢、塔ノ入車丁、坂谷古墳などの小円墳などが見られ、北東部の山地に郡山横穴古墳群ほか数群の横穴が存在している。白石市内のほとんどの古墳が集中するこの地域は肥沃な農耕地を背景にして最も早く階級分化が進み、これらの古墳に埋葬された地方豪族達によって斎が川流域を含む白石市周辺が支配されていたと考えられる。

奈良・平安時代に入ると、北無双作遺跡、白石沖遺跡、二丈橋遺跡、才原遺跡、龜出西遺跡、本郷遺跡、観音崎遺跡、金倉遺跡などが存在し、斎が川流域では増え稻作農耕が盛んになったことが窺われる。また、白石川・斎が川流域の沖積低地に条里遺構の存在が推定され、白石地方も次第に律令体制の中に組み込まれていったものと思われる。



第2図 周辺の遺跡

### III. 調査の方法と概要

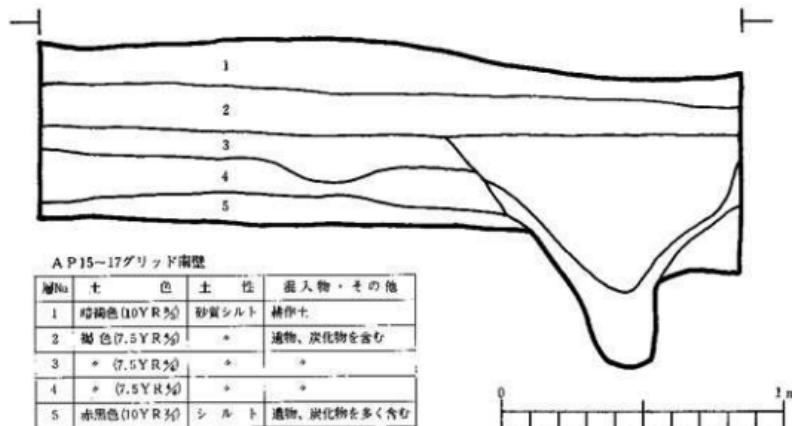
谷津川遺跡：調査区は、I, IIの両区にわけて設定した。遺跡内をほぼ東西に走る6mの幹線道路の軸杭を基準にして3mのグリッドを組んだ。地区名は東西方向をアルファベット、南北方向をアラビア数字で表し、両者の組み合わせで呼ぶことにした。調査区西側から大きくA・B・C…の順に地区を決め、各地区のグリッドごとにさらにA-Zをひとつの単位としてアルファベットをつけた。また数字は、調査区の北側を11区として南側にいくにしたがって数を増やしていくようにした。この地区的設定は、I, II区とも同様である。

発掘は、遺跡の基本層序、造構の存在を確認するため、2~3グリッドを1単位とした南北に長いトレンチを二列おきに設定した。その結果、2調査区のうちI区では、3層と4層からそれぞれ掘り込まれた溝状造構2本を検出した。南北に走るものと東西に走る2本である。

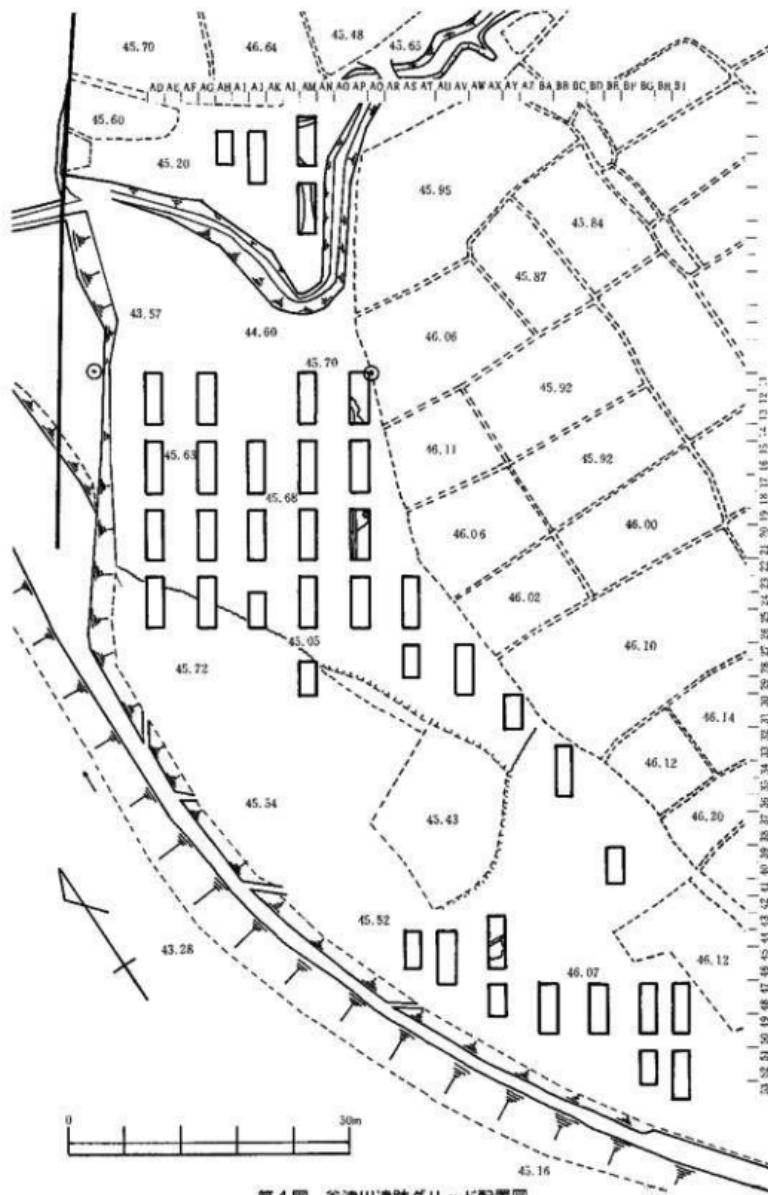
未精査ではあるが、その掘り込み面などから住居跡等よりは、後世のものである。また、I区において遺物は出土していない。

I区では、住居跡3軒を検出した。AP11~13・AP19~21・AX43~45区からである。その他住居跡より後世の溝状構造2本を検出した。また、AP15~17区から後世の溝状構造に切られた状態で落ち込みが確認された。その確認面上から多量の弥生土器片が出土している。未精査なので造構かどうかは不明である。

なお、調査区の拡張は、天候の不順、調査期間および附近での水田使用の関係などから行わなかった。



第3図 谷津川遺跡基本層序



第4図 谷津川遺跡グリッド配置図

## IV. 発見遺構と出土遺物

### 1. 谷津川遺跡

#### (1) 基本層序

基本的に、1層から5層まで確認され、6層は地山になる。1層は表上で暗褐色砂質シルト層である。2層は褐色砂質シルト層で、調査区全体にはほぼ水平に堆積している。3層は褐色砂質シルト層で、調査区東にみられない。2・3層は溝の堆積土として確認できる。4層は暗褐色砂質シルト層で2層に細別され、調査区全体に堆積している。5層は赤黒色シルト層である。遺物は2層から5層まで出土し、弥生時代から奈良・平安時代までの各時期の遺物を含んでいる。I区・II区とも基本層序は同一である。

#### (2) 発見遺構

今回の調査は遺構及び範囲確認調査であるため、平面プランの確認のみを行うにとどめた。確認された遺構は、竪穴住居跡3軒、溝状造構7本である。

なお性格は不明であるがA P15~17グリッドから多量の弥生七器片が出土する落ち込みが確認された。未精査なので遺構かどうかは不明である。

#### (3) 出土遺物

調査区の基本層序の1層から5層までの各層より不規則な状態で弥生土器・土師器・須恵器などが出土している。

##### 弥生土器（第5図）

第5図1：壺の破片で、太いヘラ描き沈線によって文様帯が描かれている。変形工字文に類似した文様が施文されており、下半部に縄文が施されている。

第5図2：浅鉢の破片で口唇部を僅かに欠く。口縁部下端に隆帶による浮線梅円文が施文される。

第5図3：細いヘラ描き沈線によって文様を施している。壺の体部である。平行沈線文が斜交する中に、梅円状文を施文している。

第5図4～9：幅の狭い（1～3mm）平行施文具によって山形文、波状文、平行沈線文などが描かれているものを一括する。4・7は深鉢で同一個体である。4は口縁部で、「口唇端より山形文が施され、口縁内面に波状文が描かれている。内外面とも丹が施されている。5・6は壺の破片で波状文が連続してめぐっている。8は壺の体部破片で、同心円文が描かれ、その末端部分で斜行および横走する平行沈線文で区切られる。平行沈線文の下に縄文原体端部を回転させ、その下に縄文が施されている。

第5図10～13：口縁部文様帯に浮線波状文を持つものを一括する。10・13は口縁上部を肥厚

させたもので複合口縁状をなす。肥厚部に縄文が施され、下端に浮線波状文が巡り、さらに浮線波状文の下に、太い沈線による山形文が描かれている。11・12は同一個体で壺の破片である。口縁部が波状を呈し、口唇部に横位連続刺突文が巡り、その下に浮線波状文が施文されている。体部は沈線で文様が施文されている。

第5図14～18：体部破片で連続山形文が横走するものを一括する。14は連続山形文の下端に縄文が施されるものである。15は2本単位の連続山形文が平行して施されるものである。16・17・18は同一個体と思われる。太い沈線による平行線の上下に連続山形文が施され、下端に縄文が描かれている。

第5図19：体部破片で、連弧文が施文され、下部に2本の平行線文が巡るものであるが小片のため文様構成等は明らかでない。

#### 土師器（第6図）

坏：すべて製作に際してロクロを使用している。器形は、体部から口縁部まで丸味をもって立ち上がるるもの（第6図1～3）と直線的に外傾するもの（第6図4・5）、体部中央が僅かに凹み、体部上半から口縁部まで直線的に外傾するもの（第6図6）がある。底部は平底を呈し第6図2・3は回転糸切り技法で、第6図5は回転ヘラ切り技法で切り離している。第6図1・4・6は底部切り離し後、底部に手持ちヘラケズリが施されている。器面調整は外面がロクロ調整、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。

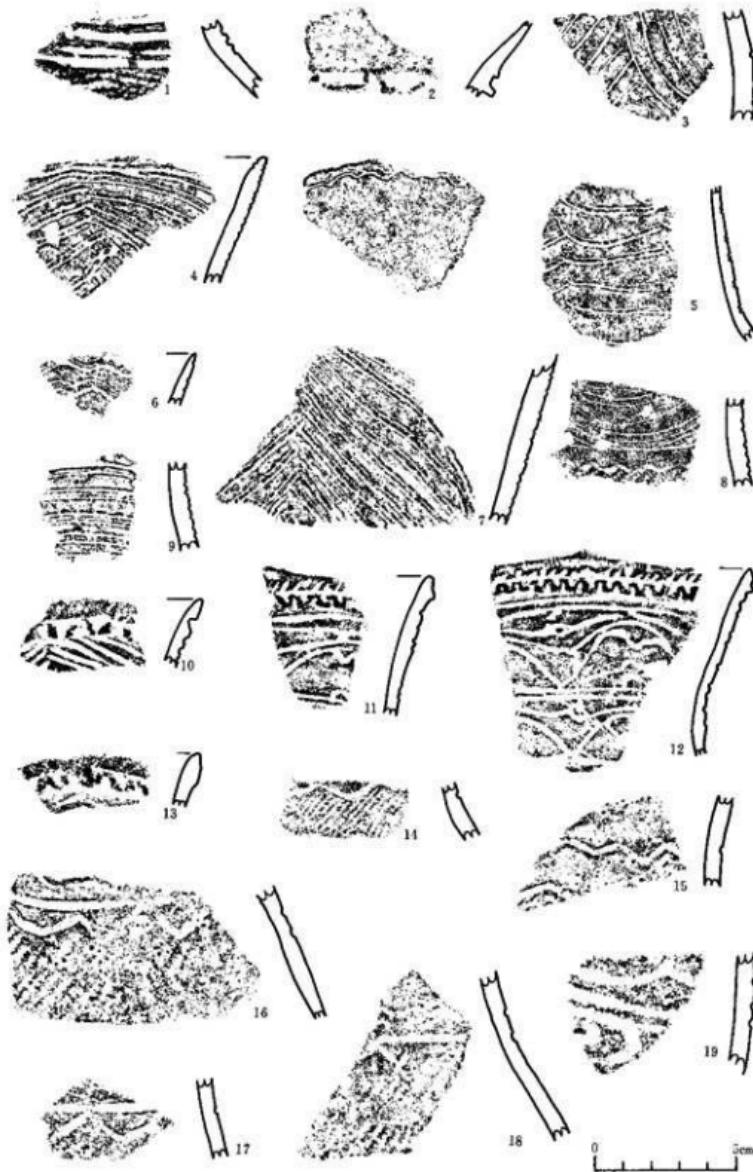
壺：第6図7は体部下半を欠く。口縁部は直線的に外傾し、端部は丸味をもつ。器面調整は口縁部外面は横ナデ、内面は刷毛目を施され、体部上半外面に刷毛目、内面にヘラナデが認められる。

高台付坏：第6図8は体部下半以下の破片であるため全体の器形は不明である。台部はわずかに内弯し、端部はわずかな平坦面をつくる。内外面とも細かいヘラミガキが施されている。

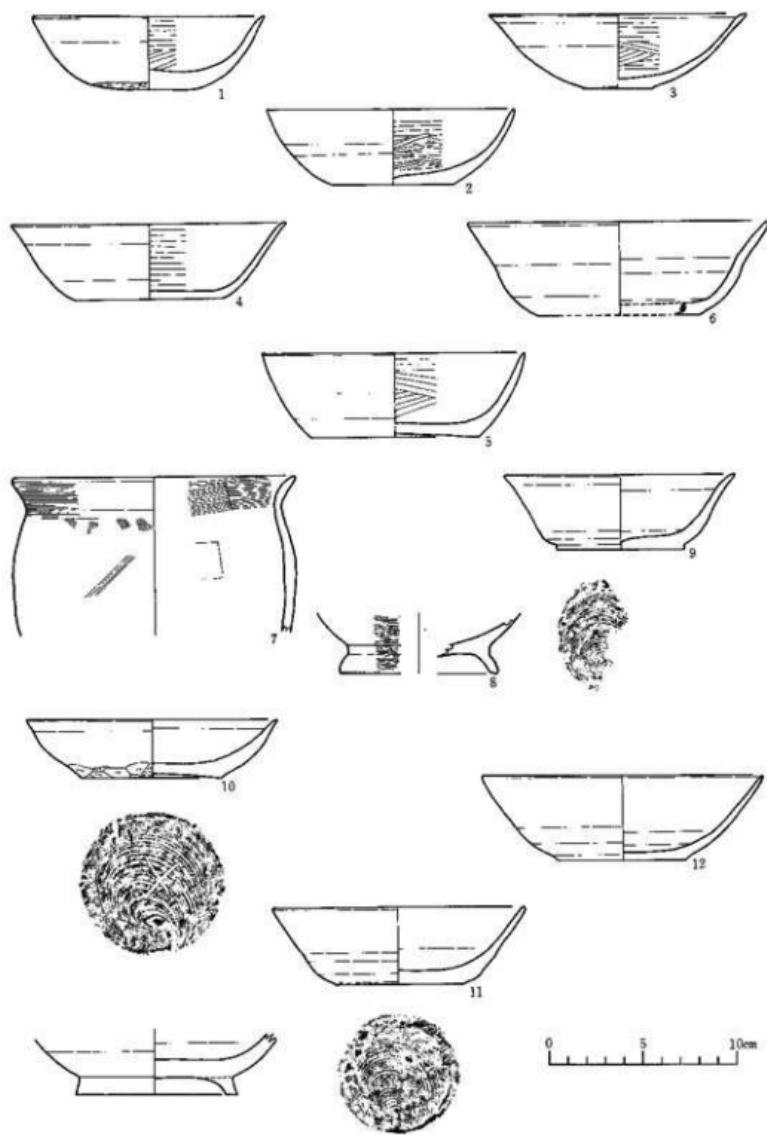
#### 須恵器

坏：すべて製作に際してロクロを使用している。器形は体部から口縁部まで内弯気味に立上がり、端部が外反するもの（第6図9）、しないもの（第6図10・11）と、直線的に外傾するもの（第6図12）がある。第6図9・10・11は底部を回転糸切り技法、第6図12は底部に回転ヘラケズリされているため、切り離しが不明である。第6図10・11は体部下半から底部に手持ちヘラケズリが施されており、第6図11では「×」印のヘラ書がある。第6図9は再調整が加えられていない。

高台付坏：第6図13は製作に際しロクロを使用している。口縁部を欠く。体部は内弯気味に開くものである。底部の切り離し技法は、高台部接合の際の調整によって消されている。



第5図 出土遺物（弥生土器拓影）



第6図 出土遺物(土師器・須恵器)

#### (4) 考 察

##### (A) 遺 物

###### (1) 弥生時代の土器

###### 〈第1群土器〉

変形工字文に類似した文様を持つものである。描かれる文様は鳥内遺跡出土遺物（石川町教育委員会：1971）などに描かれているものに共通するもので東北地方の弥生土器編年の初頭に位置づけられている大泉式土器に施されている文様と類似している。

本資料は2例のみの出土で、かつ小片のため文様構成等にお明確でない点もあるが、ここでは大泉式土器として理解しておきたい。

###### 〈第2群土器〉

細いヘラ状工具による沈線で平行沈線文・楕円文を描いているものである。この文様は刈田郡藏王町円田出土の長頸壺を標式とする円田式（伊東：1960）の文様と共通する。この群の土器はその文様上の特徴から、円田式に属するものと考えられる。

###### 〈第3群土器〉

幅の狭い平行施文具によって山形文、波状文、平行沈線文などが描かれているものである。この群の土器はその文様上の特徴から、福島県原町市桜井遺跡出土土器を標式とする桜井式（伊藤：1955）に属するものと考えられる。

###### 〈第4群土器〉

口縁部が肥厚し複合口縁をなすものがある。文様は口縁部下端に浮線波状文、体部に太い沈線による平行線文および連續山形文を施しているものである。

これらの土器は一括して弥生時代末に位置づけられている天王川式に属するものと考えられる。

###### (2) 古代の土器

###### 〈土師器〉

土師器では、壺、高台付壺、甕が出土しているが、このうち数量の多い壺についてのみ分類を行った。

壺：すべて製作に際してロクロを使用している。ロクロから切離された後、すべて器内面がヘラミガキと黒色処理されている。底部切離し技法から次の3類に分類することができる。

壺A類—底部の切り離しが回転糸切りによるものである。

壺B類—底部の切り離しが回転ヘラ切りによるものである。

壺C類 体部下端から底部全面にかけて手持ヘラケズリの再調整が加えられているため、底部の切り離しが不明のものである。

高台付坏：口縁部から体部を欠き、製作の際にロクロを使用している。底部の切り離しは手持ちヘラケズリが施されているため不明である。底部の周縁は高台接合の際のナデ調整がみられる。高台部の内面以外のすべてにヘラミガキが施されており、黒色処理は全面に及んでいる。

甕：製作に際しロクロを使用しないもので、口縁径と体部最大径が同一である。器面調整は口縁部外面は横ナデ、内面は刷毛目がみられる。体部上半の外面に刷毛目、内面にヘラナデが施されている。

#### （須恵器）

須恵器では坏、高台付坏が出士している。このうち坏についてのみ分類を行った。

坏：すべて製作に際してロクロを使用している。坏は底部の切り離し技法、再調整の有無から次の2類に分類することができる。

坏A類：底部の切り離しが回転糸切りによるものである。これはさらに再調整のあるもの

(AⅠ類)と再調整のないもの(AⅡ類)とに分類される。

AⅠ類：体部下端に手持ちヘラケズリの再調整が加えられているものである。

AⅡ類：再調整のないものである。

坏B類：底部全面に手持ちヘラケズリの再調整が加えられているため底部の切り離しが不明のものである。

高台付坏：回転ヘラケズリの再調整が加えられているため底部の切り離しが不明のものである。

以上のような分類から、土師器甕一点を除き、すべてにロクロを使用していることから、土師器および須恵器は表杉ノ入式期に比定される。なお、土師器甕については、器形、同一グリッド・同一層の出土遺物等から表杉ノ入式期のものと思われる。

## 2. 江ノ下遺跡

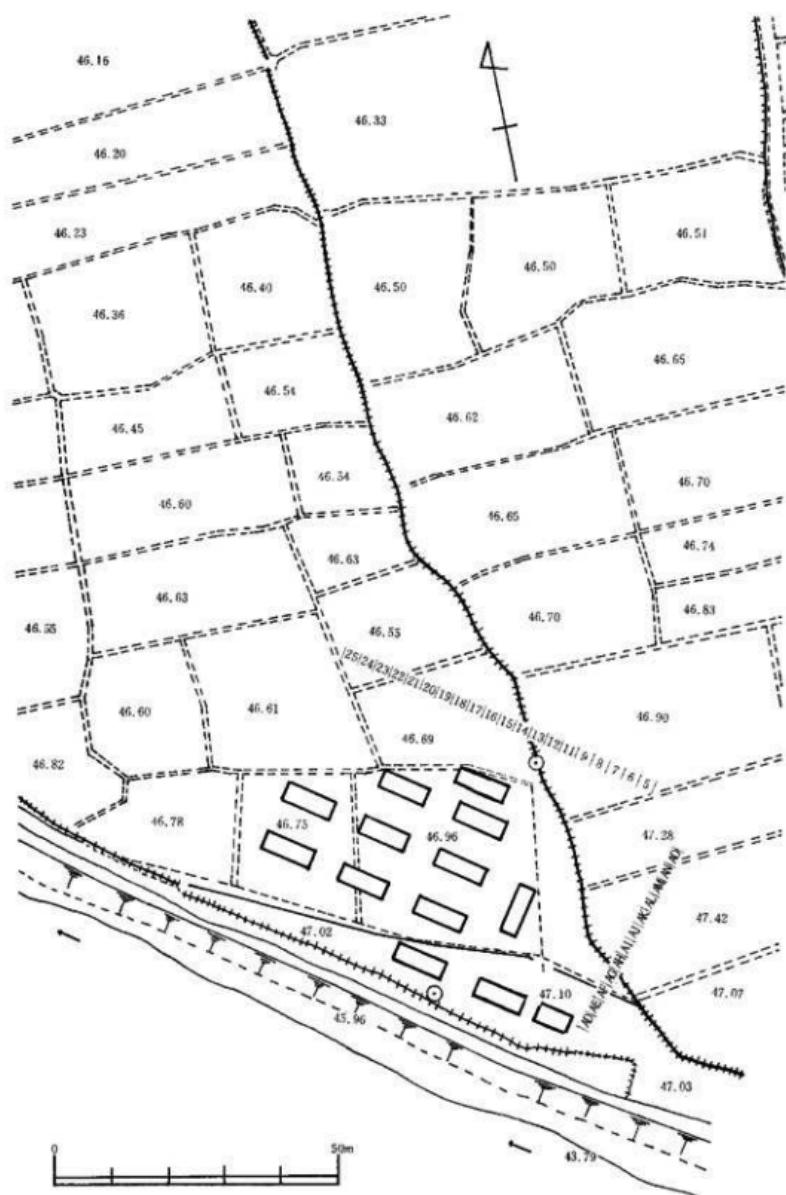
### (1) 基本層序

基本的に1層から7層まで確認された。1層は水田耕作土で暗青灰色粘土層である。2層は褐色シルト層で、若干の土師器片を含んでいる。3層は暗褐色粘質シルト層である。4層は暗褐色粘土層で、2層に細別される。5層は灰色の砂で、石英、長石粒を含んでいる。6層は明褐色細砂で、石英砂や雲母を多量に含む。7層は暗灰色粘土層である。

1層から7層まで調査区全体に堆積している。ほぼ水平の堆積状況である。

### (2) 発見遺構

今回の調査で遺構は発見されなかった。



第7図 江ノ下遺跡グリッド配置図

### (3) 出土遺物

土師器片が若干、出土している。いずれも細片なので、その器形を推定できるものはない。

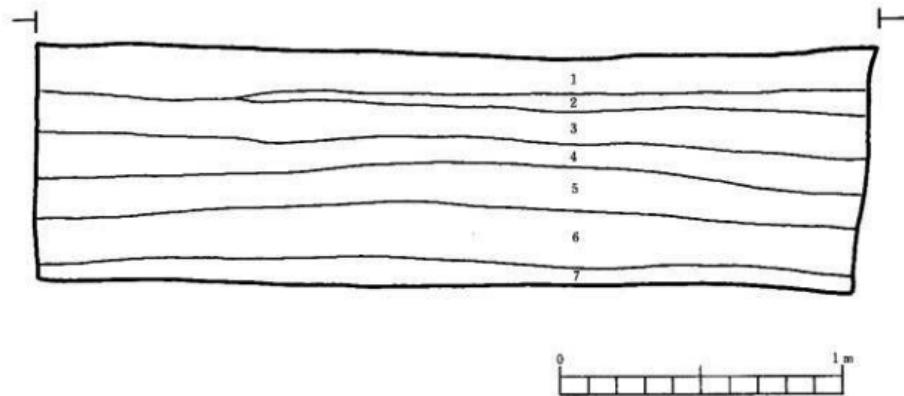
### (4) 考 察

今回の調査では、遺物の若干の散布はあったが、遺構は発見されなかった。しかし、以前、本遺跡で完形の土師器や須恵器片および、炭化米をはじめとする各種の植物遺存体等が出土している。

出土地点は、教示者により若干の相違はあるが、そのほとんどは谷津川の河川敷である。なかには河川流域附近もある。今回の調査区と谷津川との比高差は約4mである。

のことから、遺構・遺物の存在はより広い範囲ないしは、より深い地点に存在するものなのか、あるいは遺物についてのみ考察すれば、河川等による二次的堆積など、多くの問題を含んでいる。

なお、植物遺存体については、佐藤敏也氏の所見によれば「種子は植生の異なるものが混然としており、第一次的植生の場所より、自然の力などによって運ばれて堆積したものである。」また、採集された炭化米については、「計測の結果、古代米とは考えられない。」としている。



AG13 グリッド							
層No	土 色	土 性	混合物・その他	4	黒褐色(10YR 5/6)	粘土	
1	暗褐色(10B G 5/6)	粘 土	新作土	5	灰 色(10Y R 5/6)	砂	
2	褐 色(10YR 5/6)	シルト		6	暗褐色(10YR 5/6)	細砂	石英砂、雲母含む
3	暗褐 色(10YR 5/6)	シルト	粘性あり	7	暗青色(10B G 5/6)	粘土	

第8図 江ノ下遺跡基本層序

## V. まとめ

1. 谷津川遺跡は谷津川および斎が川が形成した自然堤防上に立地している。
  2. 江ノ下遺跡は谷津川の河川敷および谷津川が形成した自然堤防上に立地している。
  3. 発見された遺構として谷津川遺跡から古代の竪穴住居跡3軒、竪穴遺構として明確さを欠くが、落ち込みを1基確認した。また、これらの遺構よりは時期的に新しい性格不明の溝が数本発見された。
  - 江ノ下遺跡からは、今回の調査で遺構は発見されなかった。
  4. 出土遺物として谷津川遺跡では弥生土器（大泉式期から犬干山式期）、土師器（平安時代のもの）、須恵器がある。
  - 江ノ下遺跡からは、土師器の細片が若干出土した。
  5. 以前、白石市内では桜井から天王山式の弥生土器の出土例は、標高400～700mの蔵王開拓上、同中、同下、下川原子前遺跡に認められた。今回の出土例は注目に値するものである。
  6. このようなことから谷津川・江ノ下遺跡からは弥生時代から平安時代までの遺物が出土しており、斎が川・谷津川流域には両遺跡とほぼ同年代の遺跡もあり、両遺跡を含めた斎が川流域の沖積低地では、長期間にわたって人々が生活していたことがわかる。
  7. 谷津川遺跡の範囲は、調査区東側の水田、同南側へと延びることが予想される。
- また、江ノ下遺跡は、調査区のさらに下面、そして調査区外へも延びることが考えられる。

### 〈引用参考文献〉 (順不同)

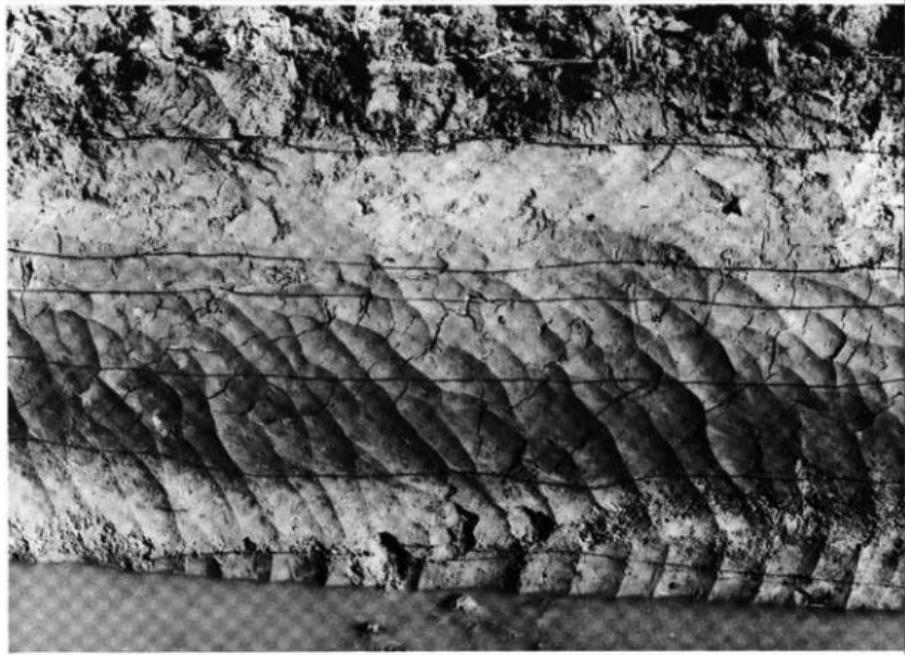
- 氏家和典 (1957) : 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』14 東北学会
- 志間泰治 (1971) : 「越後沼遺跡」宮城県教育委員会、東北電力株式会社
- 宮城県教育委員会 (1974) : 「東北新幹線関係調査報告書I -西野山遺跡-」
- 宮城県教育委員会 (1974) : 「東北新幹線関係調査報告書I -岩切鴻ノ巣遺跡-」
- 宮城県教育委員会 (1980) : 「東北自動車道遺跡調査報告書山一宮沢遺跡」
- 伊東信雄 (1960) : 「古代史」『宮城県史』第1巻 宮城県
- 石川町教育委員会 (1971) : 「鳥内遺跡発掘調査概報」
- 白石市史編さん委員会 (1976) : 「白石市史」別巻 白石市
- 宮城県教育委員会 (1980) : 「東北新幹線関係遺跡調査報告書II -山中遺跡・谷津川遺跡-」
- 中村五郎 (1976) : 「東北地方南部の弥生式I: 装飾年」東北考古学の諸問題
- 中橋彰吾・清野後太朗 (1978) : 「観音崎遺跡」『白石市文化財調査報告書』第18集
- 伊藤玄二 (1966) : 「弥生文化の發展と地域性—東北」日本の考古学 第3巻
- 伊東信雄 (1960) : 「東北」『日本考古学講座』第4巻



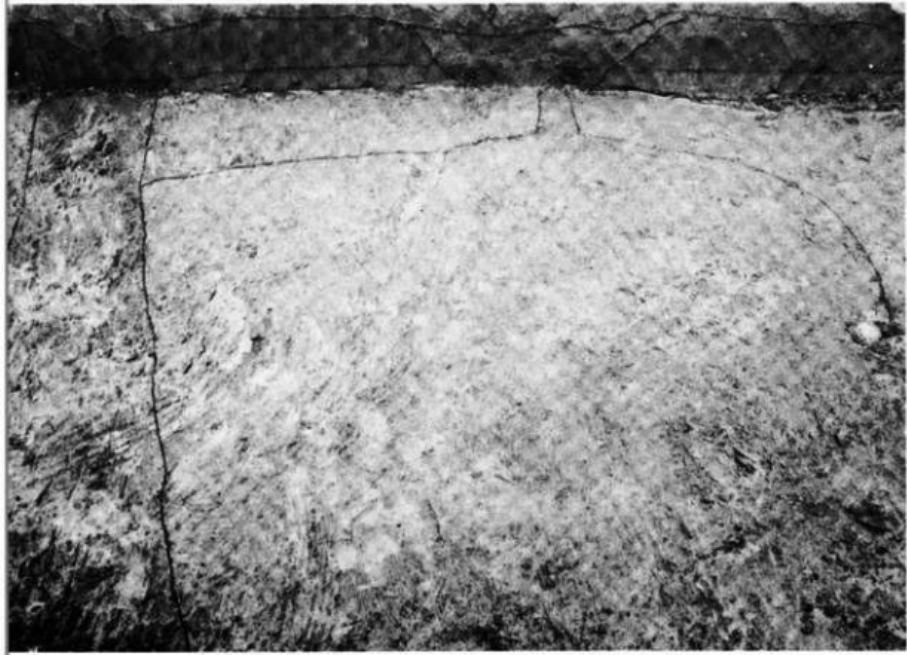
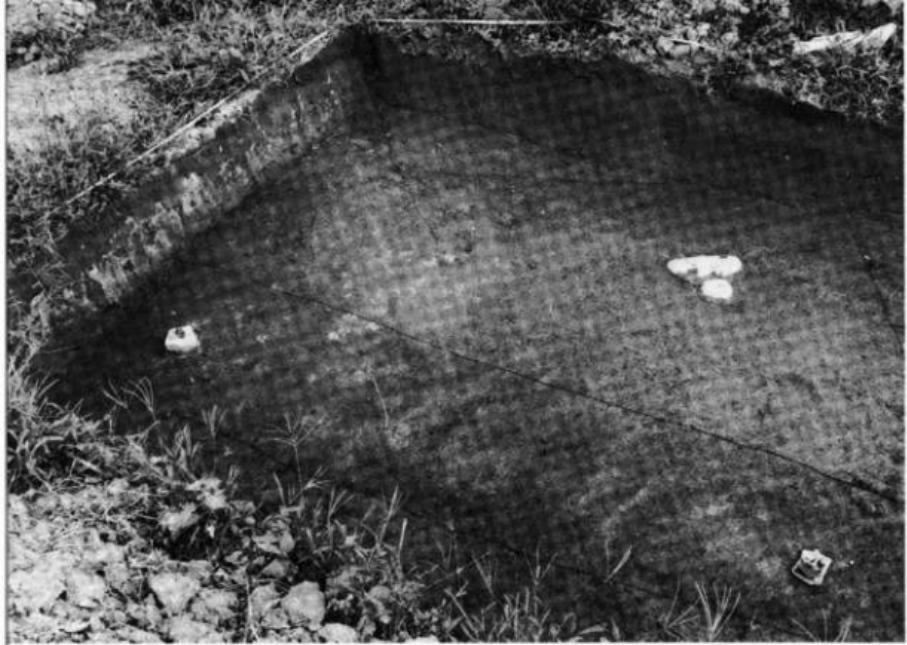
図版1 上：谷津川遺跡遠景（北側から）  
下：江ノ下遺跡遠景（北側から）



図版2 上：谷津川遺跡発掘風景（南側から）  
下：江ノ下遺跡発掘風景（東側から）

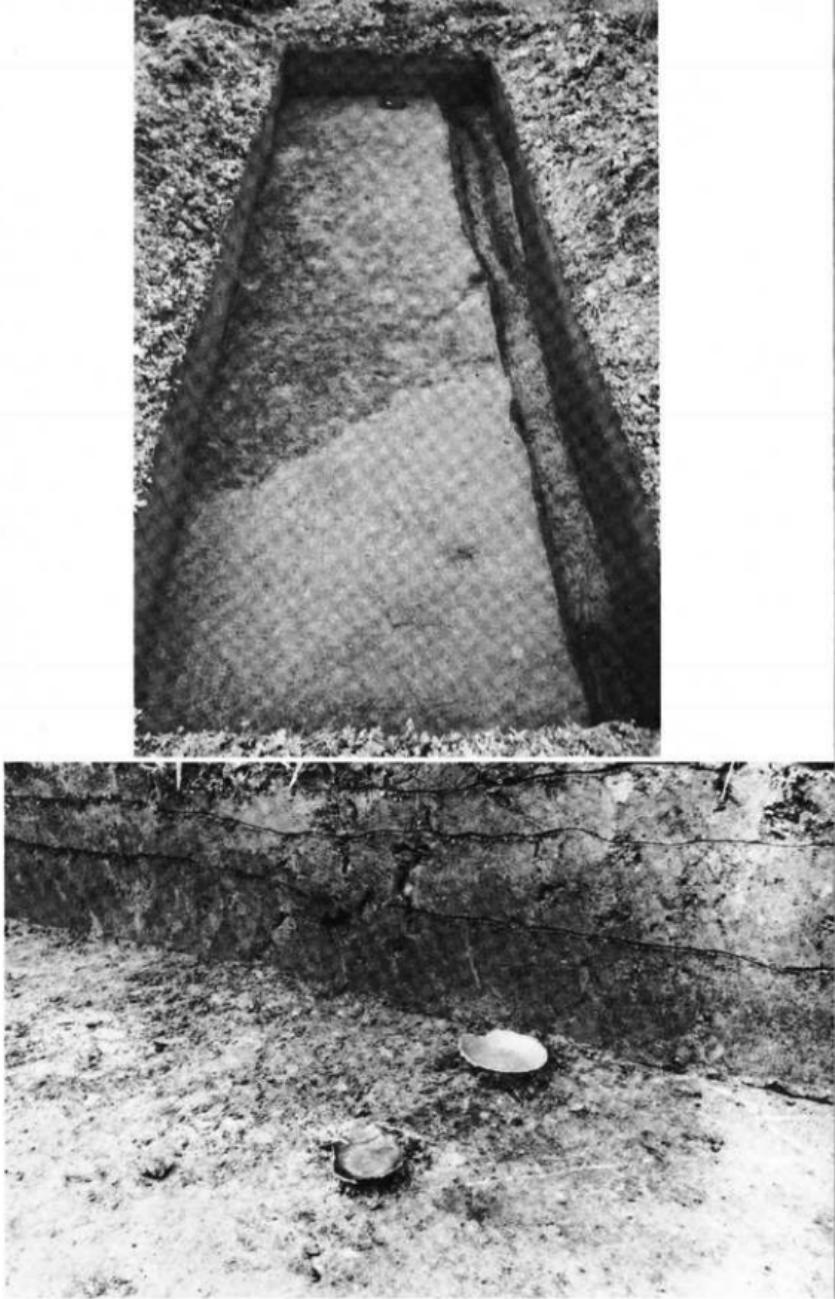


図版3 上：谷津川遺跡基本層序（西側から）  
下：江ノ下遺跡基本層序（西側から）

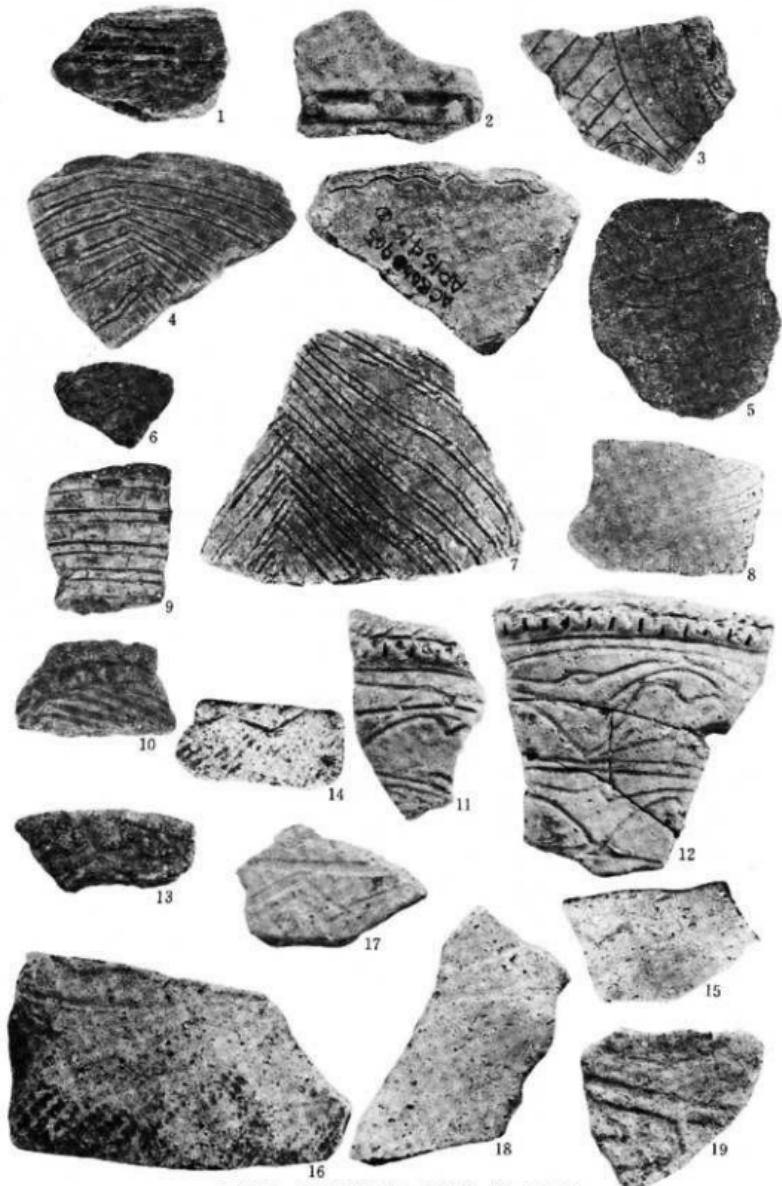


図版4 上：谷津川遺跡遺構確認状況 (A P 19~21)

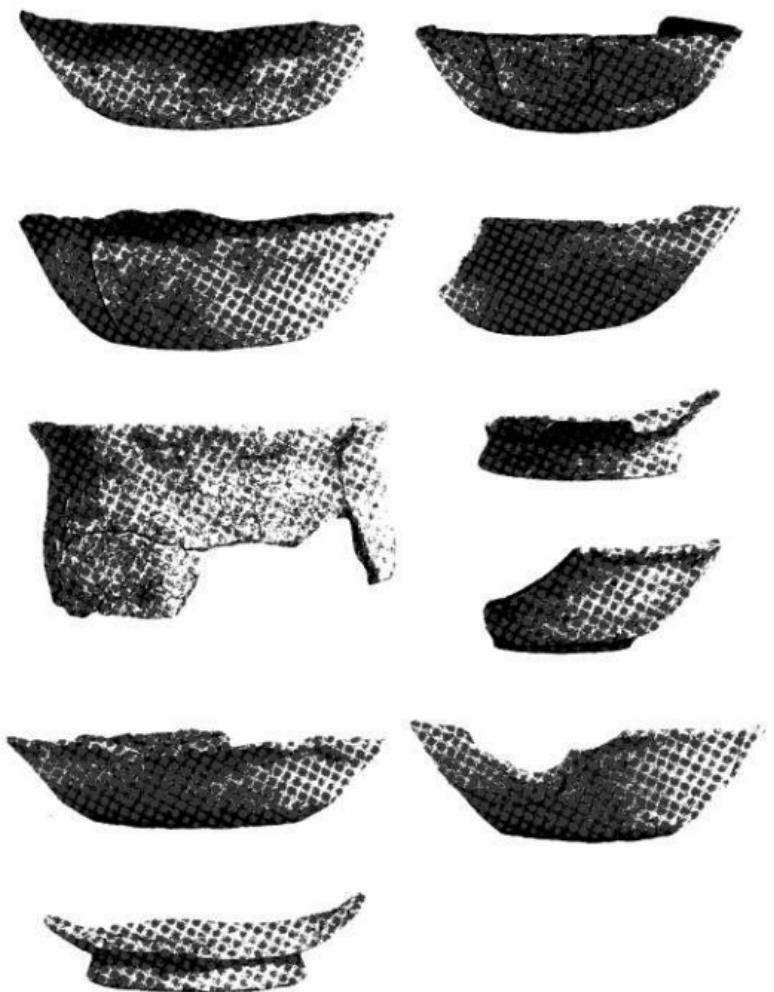
下：谷津川遺跡遺構確認状況 (A X 43~45)



図版5 上：谷津川遺跡遺構確認状況（A P 15～17）  
下：谷津川遺跡遺物出土状況（A P 11～13）



図版6 谷津川遺跡出土遺物（弥生土器）



図版 7 谷津川遺跡出土遺物（土師器・須恵器）

---

白石市文化財調査報告書第23集  
谷津川・江ノ下遺跡調査報告書

昭和56年3月20日 印刷  
昭和56年3月31日 発行

発行 白石市教育委員会  
宮城県白石市宇都小路35 ☎5-2111

印刷 株式会社 東北プリント  
仙台市立町24-24 ☎ 63-1166

---

